

北海道の SPF・CM 農場とともに歩んだ 20 年 「ホクレン SPF 豚ピラミッド」

岩 瀬 俊 雄 (ホクレン農業協同組合連合会)

Iwase, T. (2011). A case study of elimination of swine dysentery in an SPF-swine farm

ALL about SWINE 37/38, 8-15

はじめに

私どもホクレン・ピラミッドの 20 年の歩みが、決して容易な道のりではなく、今現在も、様々な困難に直面してもがき続けていることを象徴するかのような、SPF・CM 農場への疾病侵入事故に対する私どもの取組みについてお示しします。すなわち、「驚愕」、「現実」、「愕然」、「迷い」、「悩み」、「決断」、「合意形成」、「再生への第一歩」、「一抹の光明」、そして、「その後の取組み」を、実際の事例を基に、その経過を検証、考察することによって、「SPF 養豚とは?」、「SPF 認定とは?」を考え、深める糸口としていただきたいと思います。

出来事

【平成 21 年 10 月 ホクレン滝川スワインステーション・養豚技術センター（通称、旧スワイン。SPF・CM 農場）にて、豚赤痢発生。】

愕然としました。旧スワインは、ホクレン・ピラミッドの初めての SPF・GGP 農場として、平成 2 年(1990 年)建設、翌年に稼働開始しました。その後、平成 20 年に新 SPF・GGP 農場（通称、新スワイン）が建設されたのを機に SPF 肉豚生産農場へと衣替えしました。

この経緯にあって、旧スワインは開設以来高い清浄性を保って来たのですが、そこで疾病侵入事故の発生。その上「豚赤痢」のような、ある意味、古典的な疾病の侵入を受けた事実私どもは大きな衝撃を受けました。

とてもみっともない話、だらしない話、お恥ずかしい話、なのですが、あえてお話し、検証の結果、見えて来たこと、考えさせられたこと、その後取り組んだことを、お示しします。

事故に対する初動

臨床症状の発見直後

赤褐色粘血便の確認、蔓延状況の把握と採材を実施し、病性鑑定を依頼すると同時に、悪性感染症との前提で、新スワインとの人的、物的交流を即座に遮断しました。

診断確定後

「道産 SPF 豚」としての出荷、取扱い停止。ホクレンでは、認定 SPF 豚農場から集荷した SPF 肉豚を、全量「道産 SPF 豚肉」として販売していますが、供給先への品質保証の見地から、速やかに「道産 SPF 豚肉」としての供給を取り止めました。

危機管理委員会の立ち上げ。

ホクレンの組織内ルールに則った危機管理対策に着手しました。

投薬による臨床症状の沈静化，浸潤状況の時系列的調査の実施。

投薬処置により，臨床症状の抑え込みに成功しました。

侵入経路・原因究明のための調査。

これには，多大な労力と時間をかけました。ヒト，モノ，ブタ，クルマ，野生鳥獣，そして犯罪的な企みまで究明対象として考えました。残念ながら，野生動物と外来者（あるいは，搬入したモノ）との複合的原因による可能性が高いとの結論に止まりました。

しかし，この調査・究明作業を通して，ソフト面（すなわち，人的側面）での水漏れがあまりに多かったことが判明しました。

農場の今後についての検討

SPF 再変換方法，再変換に伴う経営収支の変更，そしてそれ以前に「存在意義」（すなわち「存続の可否」）という根源的な課題に対する検討さえもしなければなりませんでした。

その後の展開

【平成 21 年 11 月 完全オールアウトによる SPF 再変換を決断。】

併せて，今まで母豚 300 頭規模であったものをほぼ半分の母豚 160 頭規模へ縮小し，同時に半数の豚舎の解体撤去を決定しました。これに対応して，現場要員も今までの半数の 4 名で運営することとしました。

完全オールアウトの方法は，種付の全面的な中止と全ての母豚の離乳時淘汰，肉豚は順次通常出

荷した上で，着手より 8 ヶ月後にすべての豚舎が空となる計画としました。

また，施設としての存続の可否の最終判断は，3 年後，平成 25 年 3 月。これは，SPF 規則上の清浄性の判断のみならず，SPF・CM 農場としての生産技術水準を達成し安定運営が出来るか否やとの総合的な見地からの判断ということになります。

【平成 21 年 12 月 日本 SPF 豚協会・農場認定委員会にて，認定停止。】

【平成 22 年 3 月 SPF 再変換（清浄化）作業，本格化。】

【平成 22 年 10 月 SPF 再変換（清浄化）作業，完了。】

【平成 22 年 10 月 21 日 種豚再導入に着手。再 SPF 化へ第一歩。】

以上が，今に至る事故の発生とその後の取組み事実のあらましです。

それでは，一連の経過の中で，私どもが発見し，反省し，そして，体得したことの要点をお示ししましょう。

方針

この SPF 再変換に取り組むにあたっての私どもの方針は，次のようなことです。

現実から，逃げない。（直視する。）

現実を，隠さない。（堂々と公表する。）

現実を，打開する。（復活を期す。）

すなわち，「ちゃんと，やる。」，「怖れることはない。」という，とても単純なことです。

姿勢

【私たちに、消費者や販売先に対して「SPFと云う名の信頼でラップされた豚肉」をお届けする、という責任と使命がある。】

より具体的に述べますと、一つには、目の前の困難を、必ず克服するという。これは、「事故は完璧に起きないことにはならない。重要な事は、起きた後でどのように対処するかだ。」との姿勢。つらく、大変ではあるけれど、必ず、後で生きるという信念にあるということです。

二つ目に、疾病侵入への事後の対処方法を手に入れることが、これから、ホクレン・ピラミッドを構成するSPF・CM農場さんが、同じ様な困難に遭遇しても、必ず役立つことになるとの考え。

これらは、すなわち、「今回の事故は起きてしまったのだから、そこで立ち止まっていないで、経験や方法論を手に入れる実践の場として絶好の機会と捉えよう。」との姿勢です。ホクレンとして、自ら実践することで、ホクレン・ピラミッドのパートナー農場さんに疾病侵入時の対処方法をお示しするということになります。

知り得たこと（防疫面で）

外来者、持ち込み品が多かったこと。防疫関連記録（外来者の入場記録や管理日誌など）の記載が曖昧であったこと。外来者の持ち込み品の消毒方法、消毒時間が一定ではなかったこと。外来者の入場後の行動監視が不十分だったこと。完全規制区内への野生動物（キツネ、ネズミ）の侵入を受けていたこと。不審者、無許可外来者対策が講じられていなかったこと、等々。多くの問題点あるいは疑問点が俎上に上がって来ました。

これらの問題点は、再変換作業と並行して検討

され、対処の考え方の整理と改善方法の確立に順次取り組んでいます。

考えさせられた（反省させられた）こと

ヒト（外来者）の出入りは、無いに越したことはない。

侵入経路および原因の究明の過程で、外来者の出入りが多かったと判断しました。飼養試験のための試験関係者の入場、設備・機械の保守管理の業者任せ、等といった行為が、日常的に違和感を感じないで行われていた（農場として許容していた）ことは、疾病危機管理の原点にも触れることと考えられます。また、ヒトの出入りは、付帯して持参する機材の搬入を伴います。当然のことながら、疾病侵入リスクを高めることとなります。

一方、入場記録では形式的な記載が多く、事実の確認のため再度当事者からの聞き取りをしなければなりません。

これらのことより、外来者に対する考え方は、入れないことを前提に入れる時は細心の注意を払うという原則を徹底することです。

日頃の観察は、ブタだけではない。施設、機械・器具も。

屋根裏では、どこが一番汚れがひどいかわかりますか？ 屋根裏に入ると、ネズミの通路（穴）がどこにあるか良くわかります。分娩舎や子豚舎のプラスチック・スノコの裏側は、構造がとても複雑で汚れを落としづらいものです。

いつも汚れているところは、すなわち、汚れが取り除きにくい場所、あるいは、そもそも清掃や消毒の対象として考えられていない場所ということです。ですから、何処が汚れやすいの

か、汚れを取り除きづらいのかがわかっていれば、豚舎環境をずっと良くすることが出来るということになります。

「ルールがあるということ」と、「ルールが正しく守られていること」とは、同じではない。複雑過ぎる防疫規則では、現場の人たちは「面倒くさい」となってしまいます。守っているようでも、形式的にやってしまう。まして、やっていることの意味や重要性など、どこかに飛んで行ってしまいます。例えば、入場記録、長靴の履き替え、入場の仕方、等々。

衛生に関しては、「頭でっかち」でした。尋常では無い「過剰意識」の塊になっていました。今、

素直に反省しています。農場全体の生産活動の中で、豚を主役とした、飼養、衛生、環境の三要素のバランスが著しく損なわれていました。

目に見えているところだけが、相手だと思っ
てはいけない。

先ほどの屋根裏はどうなっていますか？ スノコ下は？

目に見えている豚舎内空間のみ、綺麗にしてもダメだということ。ダクト・ファン、換気ファン、排気口、入気口といった換気に関わる装置は、埃の蓄積が激しいものです。定期的に掃除をしなければ、性能を落とすばかりか費用の無駄ともなります。

【再変換作業の中で見えた実態】



サイクル・ファンの屋根裏側。(写真)



排気ファンの舎内側。(写真)



雑然とした詰所。(写真)



廃棄物品の山。(写真)

繰り返り言としての「豚舎の消毒、消毒の徹底」は、無意味。

当たり前に言われることなのですが、具体的に示さないと意味がありません。現場では、極めて具体的なやり方が真に目指す作業であり、効果が期待出来ます。また、消毒を偏重するばかりに、掃除や水洗がいい加減ではさらに話にならないと言えます。

衛生水準の差異による豚舎間の規制は、功罪半ばする。

現場を担う人達の中に、「あの豚舎は汚い。」とか、「この豚舎はきれい。」と言った意識が生まれて来るのは困りものです。一つの農場の中で、清浄度に差があってははいけません。それでも、永年飼っているとどうしても豚舎毎のきれい、汚いが既成事実化してしまいます。

むしろ、豚舎間に差を設けるとするならば、「この豚舎は、他の豚舎よりも高い清浄性を維持しなければならない。」といった前向きな意識が必要でしょう。

初めに、ブタありき。

要は、農場全体でバランスが取れた生産活動を行う、ということです。

すなわち、初めに、ブタがいて、施設や環境があって、ヒトが扱って、そして、衛生が来る、という順番だと思います。

最近、この順番が崩れたり、すっかり逆になったりする事例があまりにも多いのが気がかりな点です。

挑戦の軌跡

ここで、約8カ月間に亘った再変換作業を、フラッシュでお示しします。再変換作業のほんの一端です。ほとんどの作業を人海戦術でやったこと、そのどれもが未経験な作業であったこと、故障者が続出したこと、などを思い返すと“よくやったな”との感慨すら覚えます。

原点への回帰（素朴な疑問の発生）

良い農場環境とは？ 消毒の徹底とは？ しっかりした防疫管理とは？ 衛生管理が行き届いているということとは？ バランスの取れた生産活動とは？

すなわち、設備や、ルールの立派さだけで論じられないということです。携わるヒトの意識と行動の問題です。



トライバー・スノコの搬出。(写真)



コンクリート・スノコの取り外し。(写真)

【再変換作業】



天井ボード剥がし。(写真)



剥がした天井ボード片の片づけ。(写真)



屋根裏の水洗。(写真)



豚舎内機材の搬出。(写真)



豚房間仕切り板の洗い。(写真)



エサ・ホッパーの洗い。(写真)



エサ・ホッパー受けの洗い。(写真)



汚水マンホールの汚泥抜き。(写真)

私どもも今回の経験から、何事も事大主義、厳格主義に陥ってしまっていたことを深く反省し、当たり前のことをきちっとやるとの姿勢を学ぶために、農場職員を1名、他のSPF・CM農場さんへ2ヶ月間、実習に出しました。ホクレンに入社してまだ2年目の新人ですが、今後、この職員を中心として再生旧スワインの生産を展開して行くつもりです。

学んだこと(まとめ) SPF豚ピラミッド・農場としての矜持

清浄環境の維持の限界に、どう対処するか？

SPF認定の面から言えば、いつでも認定の条件をクリアしているのが一番良いのですが、未来永劫100%確実とは行きません。

それでも、SPFのルールは肅々と守らなければなりません。SPF豚と日本SPF豚協会の存在が、社会的に大きくなった今日、これすら守れないなら、SPF豚は社会から見限られてしまいます。

自らのSPF豚農場の発展のために...

また、農場の側に立って言えば、認定に至らない事態に遭遇しても、SPFの看板を維持する



再変換後初めての種豚導入。(写真)

に汲々とした態度や姑息な行動は避けなければなりません。堂々と事実を直視し復活に汗を流すべきです。

この真摯な取り組みこそが、道産SPF豚のブランド力を高め、消費者の支持が得られることになると確信しております。

これこそが、まさしく「SPF精神」だと思います。

ホクレン SPF 豚ポリシーの誕生

平成 22 年 11 月、私どもは「ホクレン SPF 豚ポリシー」を制定しました。内容は、以下のとおりです。

- 一、ホクレン SPF 豚ピラミッドを構成する農場とホクレンは、互いの発展と繁栄のため、相互の事業目的を尊重し協調と互助の精神を以って強い協力関係を形成する。
- 二、「道産 SPF 豚生産農場」とホクレンは、揺るぎのない SPF 精神を持って、「道産 SPF 豚」の品質の向上と生産信頼性に共に責任を有し、相互協調によって、銘柄性の強化と更なる発展を目指す。

(平成 22 年 11 月制定)

この内容は、私たちのピラミッドでは、今まで不文律の「盟約」として当然のことでありましたが、年月を重ねて来るにつれ、希薄になって来ました。

そこで、今回、パートナー農場群とホクレンが、お互いにもう一度目的を確認するために、あえて明文化したという背景があります。

このポリシーで、特に注目していただきたいのは、二番目の項です。これは、SPF 養豚を生産から販売まで結び付ける中身となっています。そうです、我々が SPF をやっている最終目標は、SPF 豚肉の銘柄性にあります。これあってこそ、との姿勢を強く示している訳です。



再生「旧スワイン」の全メンバー。(写真)

おわりに

私どものピラミッドは、これまでの 20 年間で「草創期」「発展期」を経て「円熟期」に至り、今、いろいろな問題が生じて来ています。今後、決して「衰退期」へ進むことなく、再び、第二の「草創期」へと歩を進めて行きたいと考えています。

これまでの 20 年から、これからの 20 年へ。ホクレン SPF 豚ピラミッドを担って行く若い農場後継者や農場技術支援者のための「お膳立て」は整いました。今後とも、ホクレン SPF 豚ピラミッドをよろしく願います。

(本原稿は、平成 22 年 11 月に開催された、日本 SPF 豚協会・日本 SPF 豚研究会合同セミナーで話題提供した内容を原稿化したものです。)